

保育ソーシャルワークにおける保育の質の向上

○ 鹿児島国際大学大学院生 氏名 笠野 恵子 (6889)

キーワード：子ども 家族支援 ソーシャルワーク

1. 研究目的

現代社会では、家族の状況も変化しつつある。共働き世帯は増加し、以前は、子育てや老人介護などの家族や地域で担ってきた生活の部分が形骸化してきている。かつて、相互扶助関係も希薄化してきている。つまり、私的な生活の中で営まれてきたケア機能が独立し、新たに社会的公的ケア領域へとシフトは始めている。広井は、「現代におけるケアということの大部分は、もともと家族や共同体の内部でおこなわれていたものが『外部化』されたものである、ということができる（広井 1997：21）」と、述べている。このようにケア機能は、看護、介護だけでなく、子育ても幼児教育を含め保育という形態で外部化されてきたのである。それらのことをふまえ、制度拡充や多様化の広まりで子育て機能の外部化の代表的機関である幼稚園・保育所・認定こども園経営者のインタビューから家族の現状を探りその中から、子どもの最善の利益に考慮し支援のできる保育ソーシャルワークの役割について検討し考察することとする。

2. 研究の視点および方法

子どもを保育する施設管理者を中心に園や家族の現状を伺い、経営者の立場から今後の経営方針や家族への提言などのインタビューを行い、今後の幼稚園、保育所及び一元化は、家族の子育て機能の「外部化」にどのような影響を与え施設と家族のコーディネートを目指す保育ソーシャルワーカーのソーシャルワークを研究の目的とした。

研究の方法：1、文献研究 2、半構造的面接による質的調査 対象者：B 県の幼稚園、保育所、認定こども園の経営者及び園長 調査期間：2012 年 7 月～9 月

3. 倫理的配慮

インタビューは、プライバシーに配慮し名前などが特定されない方法で取り扱い、結果の分析などについては、本研究の目的以外には使用しないことを明確にした上で、協力を依頼した。

※尚、本研究では保育園、保育所の呼称を保育所に、幼稚園と保育所の統合化を幼保一元化に統一し、保育士、幼稚園教諭をあわせて「保育者」とした。

4. 研究結果

共通したキーワードから「家族」「子ども」「地域との連携」「経営」に分類。「経営」項目を「今後の園経営の在り方」に細分類した。【】は経営者の言葉を引用。

主な引用語句として以下の内容があげられる。

《家族》【モンスターペアレントと称される保護者の増加傾向】【園行事に参加せず、社会の認識とずれが大きい】【子育て層の場合、子育てや生活基盤の確保に追われ、国の施策などに多くの意見をもちながらもそれらの層を引っ張るリーダー不足】【働く母親が増え、しつけや育児を園任せという考えの親もいて、どのように親の意識をプラスになるようにもっていけるのか】【挨拶などの日常的な躰ができずに苦悩】【家庭と施設との信頼関係が希薄化傾向】【個人重視の時代に大切なことは、共同性や連帯性への自覚で】【家族のあり方は変化した】

《子ども》【昔と比べて遊びの変化がみられ、植物に興味を持たない子どもが増えた】【挨拶などできない子どもが増え同時にコミュニケーション能力の低下がみられる】

《地域との連携》【地域との交流は以前と比べ薄い】【園の行事に不参加の保護者が増加した。】

《経営》【公立幼稚園の場合、職員採用試験の手控えて若年層の職員が減少し、保育そのものは、大きな問題もなく進んではいるものの保育内容がマンネリ化】

【3歳以上児に関しては幼稚園教育要領と保育所保育指針が文部科学省と厚生労働省の共同告示になり保育内容自体もほとんど変わらない】【国・自治体の役割として自治体により予算の偏りがある。隣町の公立幼稚園の場合でも保育料に差がある】【就学前の乳幼児に関わる予算は、文部科学省、厚生労働省で大きな開きがある】【同じ子どもであるにかかわらず通う施設により、補助金の額が違う。】

《今後の園経営の在り方》【子どもと保育者との信頼関係を基盤とする子どもの主体的な活動を大切に、適切な環境の構成を行う】【子ども一人一人の特性と発達の課題に即した指導を行う】

5. 考 察

新エンゼルプランについて松村らは、「第一に一連の少子化対策が、保育サービスの充実を中心としたものだった。」(松村 2009: 31) と訴える。休日保育や延長保育、夜間保育、お泊り保育といった親の多様なニーズにこたえる保育サービスが、新エンゼルプランの中で整備されてきたが、果たして家族側の立場と保育サービスの充実だけでよかったのか、保育サービスのみならず企業側などの雇う側が子育て支援をどれだけ積極的に取り入れ育児休暇や育児に関する時間の柔軟な対応をとっていたのか。家族と施設、施設職員と子ども等の人間関係を取り戻し連携し再構築することは意味深いものがあるだろう。そのためには、子どもの最善の利益を優先させソーシャルワーク機能を発揮できる保育ソーシャルワーカーが保育所や幼稚園などの施設と子どもと親の橋渡し役になり家族を支援していく体制作りをさらに強化していく必要があるだろう。

今後の課題として、今回の調査の不十分さを痛感し保育所や幼稚園経営者、保育者などのインタビュー回数を増やし地域性等を比較検討し、子育ての外部化と家族機能の関係性について、さらに研究を深めていきたい。

文献・ 広井良典 (1997) 『ケアを問いなおすー「深層の時間」と高齢化社会』 ちくま新書、21.

・ 松村和子他編 (2009) 『保育の場で出会うー家族援助論ー家族の発達に目を向けて』 建帛社、31.